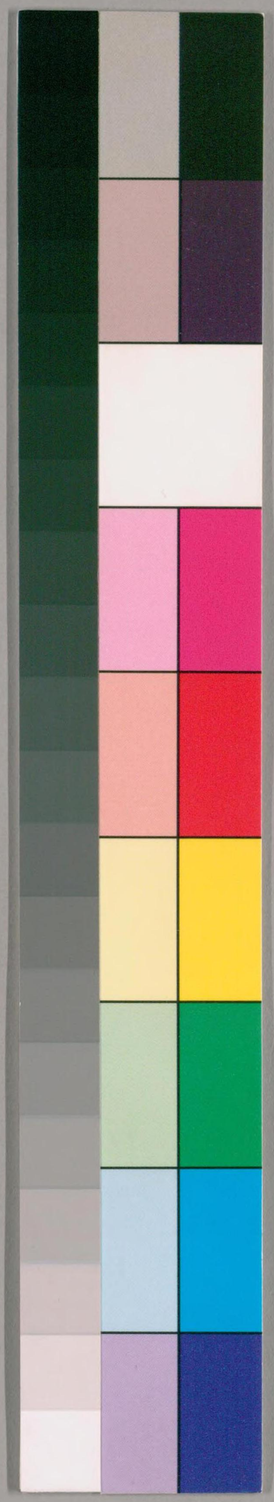

国立国会図書館　タイトル『勇士物語 5巻』 請求記号 858-85

ガラス使用

858-85

勇士物語卷之

眞州伊達政宗卿の家の時掾下 吉言寺へ乗給し
ありし佛壇乃不動とかゝ給ひしつきのまゝ
其御ゆるものそいとたけく志き姿なり也尋
給ひきりを習ひの義見を不動明王とかゝ
ハ其けくしくすしませとも慈悲ゆくしく家
をしくさせ給ふと言ひ正宗度中ゆゑ給ふくさせハ武
物ゆるへきものくんゆとおりのゆりとの給ひきりを
しそのとく勇猛にして古平とまし給ひきり
十八歳より作竹義重會津義廣岩城常隆石川
昭光白川義近二本雲吉原等の隣郡の諸侯と戦

国立国会図書館　タイトル『勇士物語 5巻』 請求記号 858-85
ガラス使用

給ふて毎度勝利を得取て乃城を攻落給ふ事数て
二十七ケ城なり二十三箇の時よりて関白川より奥大
畧掌に入給ふ壮策にして秀吉公に叛く物鮮にて
なり大なり働ひかりて秀吉公より感状に新給ひを
執其文云々度於釜山海浅野弾正父子及羽織
更其方助合得大利ゆゑ事日本国中名を及中三
国を無比類働とあるに諸将の感状おほしといへども如
此乃祝慶辞給ふ事希なりと政家愛荒
くなり給ふ

○安藝国も陸奥守大江朝臣元就を先祖孫倉乃三
代将軍の執権因幡守廣元の末孫なり七歳乃時

厳島の明神へ来詣し給ふて中向れとり供し給ふを習
のこゝのに明神へ来ていふ事をとりこのことにて事ありしを
執と同ぶ事なれのうけなり幼少人の氣にあいんとて
なる冥加福徳寿命なくとりくにいひ給ひ事
めれとやはりはまれらる厳しり中国を皆ともせ
る事なれと行誓やしくゆといひ給ひをり元就支給
む中国を皆とやしらるゝ小の行誓なり日本国を
皆ゆりさせてやしゆきとやるきこのとゝのこ
ひをうしつきこれともさるまゝかくへ其中国を
皆ゆとりまして後よといひ給れば元就愛氣をうけり
まひ日本を皆とらんと極りて漸中国をとるべし中

図をとらんとおもひつゞなかとして中国をもとらるゝきこ
との給ひきるとありされども如や終り中国を手に
いまとく大身となりかひきる
○鴟鴞乃雛を凌空のあらさしあり虎豹ハ食牛乃
氣なりといふてあり鴟や霧なとは卵をもてより定
とるきるんとおもひ氣さしなり豹虎を生くこりもや
牛るをくらうんとすりいさ相ひあらいるとりや天下
より名をなくだ花のを幼かよりしるものなり伝
長云ハ十ツ梨の時なり何ひくをて子ともと
とてまけ勝とるこのまは強あらへて拙ひ給ひとり
となり。家康云ハ葛蒲さりを見知ましくらく勝

員の名をかゝ稱く作きるとなり其卵世より名を
とりたる人をいとけなき時より常の児とは知し
らずと見たるより正木大膳といふ者十二三のとし
よりるをあらひきるに行手縄かくなり常なるを
師匠いらく行手縄といふ者とよく常なく後
の事なりいまた飛練も常に用ふさやうに常なるを
身なりあしくなるこのなりまゝ行手縄かくよくの
事給へといひ殺なる大猪ゆのく侍の大将となるんもの
ゝ手縄にまとりて何れ用にそれ何でさや下知となし
又ハ勝員せんにも行手縄をよく常なるてこそよく
めとて終に取引なりしとなりはあらるゝ行に

よろへきこゝろの形り行事もとゝとりさしなひたるす
のことあるへかたり給し
○ 何る人かたり給し織田信長平ハ数の事なるまゝ究
なり給し給ひきるなるにて下ゆりひの四ヶ所にいらず
秀吉ハこされ心願ふくもれ降来し給れど
此ゆるしなりしなりし天下早此手に入しと思ひ
してて下れまゝ数人ハ寛仁大度の心なりて
形りかたしと見たるなり寛仁といふハあらわるゆ
うふしく人をよく恵光すなり寛則ハもつく
をうる恵則ハ人を使ふうと孔子ものゝ毎ひしと
なりか又寛仁大度といふ事ハ勇仁智の言葉の

ち下野守君来自税物大ねさしく大佛殿に係ありて
なりきるを松永東付して中村と討捕て大佛殿
を焼たりしも十月十日の事ゆくなりしとなり
此中村新兵衛ハうくまれさ勇ちにて数度乃働し
そうゆへに後中村といひ給しとなり
○ 今郡加兵衛と云しものなり他ハ秀吉ニ小の事
にして居給りきるゆへ形ろ事にや後に月明智
にまさしたりきるとりく明智後を付へけり
ある時明智が兵衛にひるひ給ひ其方ハ此ん小秀吉
にまさしとしきく秀吉内乃右ハ付ふとうひ
ないかたる事にてあるとしろ申ちきるさんに

国立国会図書館　タイトル『勇士物語 5巻』 請求記号 858-85
ガラス使用

先ほ秀吾ニ不生ニ往くゆ内のものゝ此仕出させる
半もいえ居れくゆさりなりしこれにくもかおりしゆ事
まはおりひのかなるは慶夜驚るかとのことにくゆ付
ゆとり給りきれど明智舌をぬるひ給ひしなり
見るぬしのさらにおしかりて事ゆりとある
人かたり給ふ

○蒲生氏彈ち家ハ家中に渡ハ右ゆつとらへるとして
出臥人にて天質夜麻にて執ゆるハむしの面整を
見ゆとにありしやかしいるなりのを給ふがゆんかまて
為給ふ燕脂乃唇艶くりのいふ時ハとのづらゆの笑が
ことくなりさるにより氏彈ち家ハ寵愛甚し賜りの

ま潘安仁が菓と車に載せるよりこと給ふ顯し寵愛
れ給ふ八右ゆつとり事ハ無右ゆも賞をなくゆ貴ゆて賤
くだり疎ハ親に途給りぬなりし風俗悪なり賞罰
正ゆくされハ氏彈ち家と恨りの毎ゆ来ゆきりあるに
族乃臣ハ蒲生ハ無勝とゆゆとのなり来ゆをとり
居たりしが此年とゆゑく然て聚洛にのがりて諫
きるゆ八右ゆつ一人を御竜也ゆより大身ゆ身にくる
沢君を恨しなり見ゆくへりゆ遂滅亡乃基なり
我愛するものゆりとも悪事となれ輩ゆ後ハ誅罰
とゆし無愛とも忠ゆるゆ思を與ゆふにて古典の
法とは申ゆ事一人を愛し義人の忠志を表なし

給ひん事大将の本意にくるに在れくひとあみさを
流し孫ひまごとも敵弾守護終り兼ひなりしを
ば四郎兵衛をもてさしかへ居りしが東しと
両し蜜(ひそり)に奉れ湯に事をよせ八太郎を討たりあれ
敵弾守敵はよし少々給ひ大りし立腹ありて蒐角を
始く四郎兵衛腹を切に見りまつ此事石田治部が捕
少々付く四郎兵衛が宿不にさしたりて委少々屋い
むけるをさてもまゝ忠義第一乃治部りを梨
これあるゝかくしたりぬべきさしば大閤へ申よん
とて此事登珠して大閤乃御前へ四郎兵衛り給
を事委中上御言葉をうりく加藤肥後守兵衛

あるさる故四郎兵衛妻子兼ひよみたりを以て
肥後の国へ下けるかくて月日を送りけるが治部が獨
が乱を少々命の思を始せんとて海路を渡のぞり
けるを給ひ風波の難に遭ひまく関が原蔭去
して大坂に着ひれを大りし歌くむかしく肥後
に帰りて自害し給しとうや
伊達政宗兵衛隆斤倉小十郎は布衣の士にて小
所なりけり時城下にて事あらり政宗兵衛内
なる乱を勇こくこれからおく諸士にて下知して火と
事さんとせられけるを風あらくいよ〳〵火
熾(さん)なりけれど諸士にて退くりけれ斤倉小

十郎政家公の子四郎に居給しうけしと見て政家公
の下知もなくさま姿をこうりて猛火に強るて退りのと
きれとも忘らしたに二人突顛し大あらあげしいひ
けるをいふ小幸く是もうりそ先のゆるすといひなし
君君は馬おりうへは大勢にあとなしにいかんこなまた
ぐ志の御るおくさられかとのゆるすをきしか孫郎に
少し隣國へさこし給かは此弓矢のよりあらはり
とて風下へより一足をさうしと姿をとれうへ
あり諸士是に力を合くきれだかとおくけしえ
きりきり政家をうく下知し給んとありまきをなす
心中に府節のとく合を給ひまきより所念を

とりたて給ひけり後世は白石の陣にとなりあり
なり時秀吉公政家殿に此葉下さまけり時所念に
十郎を先し政家殿に御ちとし大名にこりたそん
と仰ありけるを少十郎兼御宮を雖ゆへ其眞刃乃
ならひ無く普代の者をうへりあゆとなりかたき作
法にて此座に御殺先下されゆへとやトやきれば秀吉公
所念を志とにと御箋ありしうへ政家に生云ちたべ
し田村六十余江のところくさうとの御ちなり
しかなり
○大坂陣の時二代目の小十郎を和陣なりをり眞州
より江戸へ入口に十郎とにつとうより殖の旗を

さしき事ありけるに八ヘ打入慶宮人を手指してと度
大坂りおゐて武剛ありて三ヶ丁ひ古郷へ生てかへり
海しこさと誓しとなり誓のことく武剛なり
政宗ありて此ものかたりなり
細川三斎殿の一族に長岡肥後といふものあり豊
おれ嚴石珠を取てまたりかたりしきるものなりし
故謀く討んとおりられ者を肥後密に出して遁
取れしとやおりひけん妻子を生害し討ほまら
ばと給居たりけるに三斎之是をゆへなひ足軽大将
増田義人とふものをよひなひ其岡肥後が為ゆ
頼るてたりよりの珠をんとおりつうちよとり竜

たりとさく汝れ有る者に行く肥後に腹をきらはべ
しさりなら其岡殿珠を取たるものなれば此箇
条半分をいひ起しくにおゐて是今度の罪科とは
殺給すべしといひまたされけるは義人は肥後のた
めにはよりこなりさるにより人おりしといへともこころ
なりく義人といひ付るまたより義人諱退中年なる
ら孫ハ足軽を門をして肥後が者に思ける者に
またはまたは門まえよりしてを明かへ御宮にて増田義
人来たりといひ入れれば義人無一人ならはいらせ給
とく門を起きたり足軽に命に告門外に残唯義人
ひりそ入れりきたりもとより肥後見悟したるす

国立国会図書館　タイトル『勇士物語 5巻』 請求記号 858-85

ガラス使用

まは義人とあらはるゝよりはゆく御急れさるうちさる
めくなされとの御言ゝ給らんの意をきくまでも
給し我なし相国て無御志給ん所存ありと言ふ
いひ給ふ義人中のくされば其事にくひ所意の意ゆ
際ゆゆげく是をゆゆ給ひく其後は義も角もこと給
ふ由ゆ給ふべしといひたり肥後是を中々実に
おまえ名をとて義人を座よへそ請しけり義人上座
よ為我り懐中しうち来あをを出しは箇條乃内
半分といひ見しき給ひて此殺伐なるやきとの所意給
請ふ事中と我思案をめくらしまへと称んごろに告
給ぬ肥後打ひ見のあらさ給れども妻子をも生害

し給れはひうへ蒐角も給し御急ともはゆく此へ
ゆくひたし中上なへと来もおそにいひたりをう
増田中にてさてとも以惜ひ身なりさもあらは我もいう
てこそ我はさうづき某牢人かく居たりし時見とへは
肥後殿の厚恩をうけてこそ尚家の縁とは義を
まゝ志れとも御意ゆ又当ひ身ゆはうへ先
此合事ゆ給ふへしと云栗給ふいひ給ひ肥後打
うなつさそまこしそらまゝなりまことゆ急ゆつ
称く長刀れ自慢し給ひつゝ我も我の抗云といひ
給りぬ幸れるゆ給りと揚芳をやらぬべしさるめ
て持来ゆゆ刀なれ給べしいさまいらんとそいひ給ひ

ろ義人ゆゑくいふにも持系ゑ長刀なりとくつ和人丸
にあし庭よりし踊出柳子忿迅虎乱入乃秋彌をとて
し平に勝負をて見しさりけるかくて義人長力を
うらうとて持庭よりかしこゆり首をのべくそ待ゆきろ肥
後見を見くらさまして体足し給ふさらは我も息
をつきゆるくと勝負を役せんと腰をかけて居を
みを取義人こさしていふゆうそかもつるを待ら
は只今まくれ主君への忠勤なりて猶よりれ肥
後家厚恵を報すなりもやく首を刎給ふ人、
じとて案志にかいひくりきろ肥後殿を杖にて
さ悲鳴としくこそくりしう中にくあ給ひ留

て今まくれあやゆりうろ我悪心をもくおほくの人
を換じて後代までの蓋れしと生にまをとゝ庭し
さへ御りしがくそのくりをとして腰をさ切く
叩くりきろ義人波をながしなくくなをれおし
三年家の見を系にの待しとなり
○籠紫住人堂田作志濃つとゝのあり久安流浪し
てあろ山里に身をかせ山の作あらせろ地をもらさ
一月二月と月をくり丙年ばかりも農業に身を屋川
し居たりしが其後の船井と云取ゆらく桃路秋さ
とつゆりのと遠説してそ尾張付たりきろ加加ろの
西へ海より居待りきろうたれたる桃路秋子ゆゑ新

他とくいまゝ幼稚(とうち)乃時おもしろ事とも志らざりをかゝ
十三歳なりし時母に向ひくいふやうにて我父なる
も給ひたるとこそ給ひ候としてとは我ゆゑ志らせ
なまはぬうやなさけなきゆゑなるかといと歌給りを
我母されたまとおりひ候とて今らくまいらぞこれらは
うたり給ふといふ事しくとひ給れど只今ゆゑの女
とお撲(おやかい)ととり給しが我掳(とり)まゐりし雑云(だうごん)に縁(ゆゑ)病(びやう)
りのに負たりとたらみとしていひたりきる我腸なる
ら安倉におりひ腸病りのいたれ是兆(しるし)すべしと頻
に向(とひつめ)給れば後りの言く此ぞ又ゆゑ堂を田作ゆゑといひ
しりのにころされたり其年まて親の歌のあるを

もしらぬ腸病りのゆゑこれしやといひしなゆゑ
てちてのうたれ給ひたるとしり給ぬ雑云したりの
と蒐もかくもなるべしと父の歌のなるゆゑに是を
ていのらなしへまいりたり歌は堂を田せしなるへ
なるならば足とうさりに弱りん付えて仏金とて
まゐり後月来にの給らん也頻にいと面伐こひにまゐる
母はしとさくよりもいはくへ迷ひ行へさや今迄
もしらせぬ女ところのたるおさになれ人の取りをと
さへまゐらしくせんとすは歌のうへの歌と知りひし
ゆへ取もしぬ同しくは出家してなれあしをとへし
と母ところにおりへとも是兆こおりひしなるらば委

あつかるべし汝が父を討たりしは富田兵庫といふものの
なりしか今は名字をかへて山下伊蔵といひ給て
加賀の国にありとききしかばよくよくたづねて討べしとありしかば
命を惜まず逢と筆にせられしその文の奥書さ
らむ首途(かどで)を祝さんと昆布(こんぶ)勝栗(かちぐり)をとり添(そへ)て給
りければ新九郎かしこまりて新九郎立よろこびていとまをこ
ひ立出九国の地より舟に乗て遥々の海陸を経て
漸加賀の国に着にけるに何ともしらずさに身をやつして
所々市のちまたをさまよひ半の役をつとめ
尋山下伊蔵を市中に尋しに当所の御師と語る
新九郎よく心を付て尋るに其年を

すでにとしへたれども本意のさまもなくてむなしくすごしけるに
新九郎市中にて縁をとりもちて伊蔵が下人に奉公(ほうこう)をかかへられ
きたり伊蔵二月(きさらぎ)の神まうでにつれられ枕席(ちんせき)を離(はな)れ
半年ばかり新九郎はかりごとをたくみ見東業をも近(ちか)く
去く湯治に参りてよき折もがなとうかがひけれど看病
しかりけれは伊蔵病身にあひて半年ばかり有て
新九郎十二段招きして六月(みなづき)の頃よりも漸快気を
ゆるりしたる時伊蔵新九郎をともなひて湯の本に
こもりて日をおくりけるにつれづれとしたる時なれば
新九郎是にて忍びて本望を遂べき事と思
ふに世をそむきて紛れいりてかへりて秋風さらに

労が腹の病とて醫師 [illegible] 其外町人まで
よひあり川め振舞とて又ゝく終夜酒宴殿数二三日も
きらう新作時をらしとおりひ伊織にむかひ我と雅
とうわりひ給ふその心あしへ其後の船井にてこそ方
の事にかかりうたれたる桃路沙うせられなり病にかん
年に入るきと幼雅の時ゟ是非とさらに志しされどと
とも此川をちて年高にかりて縁とりと思て生
ひしあるりとうぐひ給しうと其方病に苦給ふ
討くハ何の意あらんと快氣と給し所に今ゟ其
のいたりところなり是悟しかへといひたり為伊織は
よしうらゆゑて桃路沙うなりあるうあして

いあしへ堂を田作なるといひしものなり所時もちやくさそ
や討たくおりつたんそまこに付ても此程の病中れおろ
さし比類なる如ゆゑまひなりさらハ廣野に出たく
勝負を変して死んとて平に時をさしめけり
屋くそくれ時にもなりなれば女人うつまを
けりと諸人こまを吹つたへ貴賤群集おびたゞ
し伊織を鑓をよこたへ言あるゝにいひをうち似合
ぬ合手をいひあるゝ時にあたりての歌明れハとと
なけかしとおりひかれ人ことして新作り実
てうゝ新作を重代の方を後一世ゝりかく
祭入伊織あのうしゆゑよりもしちたりやりと

国立国会図書館　タイトル『勇士物語 5巻』 請求記号 858-85
ガラス使用

858
85

1564

投持て孝行は男子を和んを忠なり累年乃親
憤をさんし給へ其貢成迎ひ申ひ新
佐業にしお遂して志ひ申し然しとりけるあり
とも屋く門へ入さりにおゆくを頼とても討てい
何乃金を取しとも力を鞘に取て給はくともか
ゆくかへりしとなり

国立国会図書館　　タイトル『勇士物語 5巻』　請求記号 858-85

ガラス使用